

# 泉鏡花「怪語」論

— 自筆原稿を手掛かりとして —

魯 惠 卿\*

(e-mail: monpen@hotmail.com)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 「怪語」の原稿
  3. 内容に関する添削
  4. おわりに
- 
- 

## 1.はじめに

生前、芥川竜之介は鏡花全集の刊行に際し「鏡花泉先生は古今に独歩する文宗なり」（「鏡花全集目録開口」）との献辞を寄せているが、それは、一生独自の作品世界を展開した鏡花文学の性格を端的に示すことばといえよう。鏡花は独特な作品世界を如何に作り上げていったのだろうか。こうした疑問を解く鍵を初期作品は蔵しているように思われる。というのは、初期作品は其の内容や、創作上の方法において、後の作品と繋がるいろんな要素を含有しているからである。そういう意味で「怪語」は、もっと注目されるべき作品といえる。

泉鏡花「怪語」は、1896年7月の『太陽』（第3巻第14号）に発表されたが、執筆時期は1893（明治26）年以前に遡る。「怪語」が鏡花の初期作品の中でも最も早い時

---

\* 延世大学校 近代韓国学研究所 研究員

期に書かれたにも関わらず、発表が遅れた背景には、当時鏡花の指導に当たっていた師尾崎紅葉の存在がある。この「怪語」が書かれた時期とは鏡花が尾崎紅葉の内弟子として指導を受けていた時期に当たるが、紅葉は作品への徹底した指導に加え、発表の時期や、掲載誌の選定等にも深く関わっていた。

泉鏡花の自筆年譜、1893年の条には、「怪語」の製作の経緯について、

十月京都に赴く。同地遊覧中なりし、先生に汽車賃の補助をうけて横寺町に帰らむがためなりき。時小春にして、途中大聖寺より大いに雪降る。年末この紀行に潤色して、「他人之妻」一篇を作る。年を経て発表せし、「怪語」は其の一齣なり。余は散佚せしのみ。1)

と、記されている。引用文からは、「怪語」がより大きい構想を持つ「他人之妻」という作品の一部であり、残りの部分は散佚されたことが分かる。「怪語」では、人妻となった幼馴染みの女性、紫谷秀に対する上杉新次の恋情を描いている。従来、「怪語」は鏡花の小説のうち、「女性への恋慕が骨格を成す」最初のもつと評価されてきた。2)「他人之妻」という原題からも推測されるように女性への恋慕が作品の骨格をなしていることは間違いないであろう。

「怪語」は、上記の年譜にも述べられているように鏡花の実体験に基づき書かれたものである。鏡花の体験は、作品の構想のみならず、人物の造型にも生かされている。他人の妻こと紫谷秀のモデルは、金沢の時計店の娘で鏡花の初恋の人と知られる湯浅しげである。しげは、鏡花の幼馴染みで鏡花よりは何歳か年上で鏡花を可愛がり、鏡花は心優しいしげに懐いたという。3)鏡花が15歳の時、しげが他の男に嫁すと、鏡花は深い衝撃と絶望感を受けたらしい。しげは鏡花の「一之巻」(1896)～「誓之巻」(1897)をはじめ幾つかの作品に絶望的な恋愛の対象たる「他人の妻」のイメージで登場する。「怪語」には鏡花の自伝的な要素が多く投影されているのであるが、「怪語」の発表が遅れたのは、個人の閥歴が色濃く反映されている作品を好まない師匠紅葉によって、発表の機会を得られなかったからであろう。4)

かく紆余曲折を経て発表された「怪語」は、当時観念小説家として文壇的地位を確保した鏡花としては異色の素材であり、当時の評者たちに注目されることはなかった。その

1)「泉鏡花年譜」(1986)『鏡花全集巻一』岩波書店、1986. 5頁。

2) 弦巻克二(1987)「鏡花的世界の予兆」『論集泉鏡花』有精堂. 6頁。

3) 須田千里(1992)「鏡花における女性類型」『文学』第3巻第2号、岩波書店. 156頁。

4)「怪語」の他にも、「お弁当三人前」(1906)などの作品が発表の機会を得られず、後に回された。

後、久しく等閑視されてきた作品であったが、鏡花ブームと呼ばわれた昭和45年以降、鏡花作品への再検討の動きの中、本格的な研究の対象となり、越野格（「泉鏡花論」『北海道大学文学部紀要』28-2、1980.）や弦巻克二（「鏡花世界の予兆」『論集泉鏡花』有精堂、1987.）らによる再評価を受け、鏡花の初期作の中でも重要な位置を占めるようになる。だが、1990年代以来研究の進展はほとんど見られるず、解決すべき問題も少なくない。例えば、その一つに、鏡花による「怪語」の自筆原稿についての解明が挙げられる。紅葉が明治20年代から30年代にかけて発表された鏡花の一部の作品に手を加えて発表させたことは公然たる事実である。紅葉の徹底した指導ぶりは添削の跡が残されている鏡花自筆の原稿から確認される。にも関わらず、「義血侠血」（1894）等、一部の作品を除き、自筆原稿に対する添削の全容が明かされたとは言いがたい。「怪語」においても事情はさほど変わらず、課題として残されたままである。5)「怪語」の原稿は、慶応義塾図書館に所蔵されている。都合41丁ある原稿の全文に亘って師尾崎紅葉による朱筆の添削の跡が見られる。6)紅葉の添削を見てみると、句読点やルビ等の細かい修正のみではなく、内容に踏み込んだ改変も多い。紅葉の添削がどの程度、作品の内容に関係しているのか、改めて検討してみる必要があるだろう。

如上の問題意識に基づき、本稿では、「怪語」の自筆原稿を対象にして添削のありようを検討する。紅葉によって改変削除された鏡花の原文を辿ることで鏡花の独自性、傾向性を読み取りたい。このような作業を通して「怪語」の新たな読みを試み、7)「怪語」の鏡花文学における位相について考察を加えたい。

## 2. 「怪語」の原稿

筆者は本論文の作成にあたり、調査を行った結果、紅葉によって削除された原稿の多くの部分を確かめることができた。「怪語」の原稿の冒頭部分は、

5)「怪語」の自筆原稿を活用した研究としては、事実と想像を混ぜ合わせるによりく虚構を生む出す創作の方法がすでに明治26年末ごろから確立されつつあったとし、それを「怪語」と「お弁当三人前」において立証しようとした越野格の「鏡花の観念小説—その人間像をめぐる—」（『日本近代文学』第二四集、1971、55頁）等がある。原稿を活用した越野の研究が論文を発表した当時においては斬新な方法であり、首肯されるが、必要に応じて原稿を部分的に活用したものであり、原稿に対する本格的な研究とは言いがたい。

6) 松村友視（1985）「鏡花初期作品の執筆時期について—『白鬼女物語』を中心に—」『三田国文』第4号、p. 30。

7)本稿における「怪語」の引用は、初出誌の本文を採用し、その他の鏡花の作品は、『鏡花全集』（1986～1989、岩波書店）による。自筆原稿は、慶応義塾図書館所蔵の原稿を対象とする。

(小説)

揭示標 {其賊}

(八十一ヨリ頁附)

第一「<sup>たびそう よげん</sup>旅僧予言」<sup>ぜん と し</sup>「前途に死あり」

文科大学の学生上杉新次、以前の経歴は爰に説かず。明治三十五年師走中旬雨の一頻りに降る日 {大雨の日} 上京の途に就きて、今や石川県石川郡、松任より粟生までの路にあり。

(原1丁オ冒頭、全266頁冒頭) 8)

のようになっている。原稿の冒頭には中央に「小説」と大きく書かれ、その次の行の上段には題名が書かれている。原稿の題名は「揭示標」とあったのが消され、さらに、「其賊」と変えられている。題名の下には「八十一ヨリ頁附」という書き込みがある。これは、文面通りに八十一よりの頁数を附けるという意味に解されるが、掲載誌の『太陽』の頁数と一致していることから推してみると、慶応義塾図書館所蔵の原稿は出版社に送られた最終稿と判断される。ただし、作品の題名が原稿の「其賊」から初出本の「怪語」へと変えられるなど、原稿と初出本文との間には多少の異同があり、印刷の段階において更なる修正が施されたものと見られる。本文は、総8章立てで、各章には「第一」<sup>たびそう よげん</sup>「旅僧予言」<sup>ぜん と し</sup>「前途に死あり」というふうにに小見出しが付いていたのが、初出本では削除されている。

「怪語」における紅葉の添削は、句読点から文レベルの改変まで多岐に亘る。「怪語」の内容を理解するにあたっては、まず、添削のありようを検討することが必要であろう。「怪語」における紅葉の添削は大きく、

- (1) 句読点の改変
- (2) ルビの改変
- (3) かなから漢字へ、漢字からかなへの変更
- (4) 送りがなの改変
- (5) 漢字の改変
- (6) 助詞・助動詞の改変

8)原稿を引用するにあたっては、引用文の取り消しラインが引かれた部分は、紅葉によって削除された部分であり、訂正した部分は { }、加筆部分は ( ) で囲み表した。また、鏡花自身によって削除された箇所は [ ] で表し、訂正部分は 【 】 で囲い区別する。なお、原稿を長く引用する際には、原稿の丁数、及び行数を示し、参考までに『鏡花全集』の対応する頁数、及び行数も併記する(原稿は「原」、全集は「全」と、また、原稿のウラはウ、オモテはオと略記する)。引用文のルビや送りがなは、必要に応じて付す。

(7) 語句の改変

(8) 文単位での改変

の8項目に分けられる。(1)～(5)の5項目は、表記についての改変である。そのうち、(5)漢字の改変には、名詞の改変をはじめとして、動詞、形容詞、副詞の改変等が含まれる。また、漢字の改変には「我」から「吾」への事例に見られるような、ことばの読みは変わらず当てる漢字のみが変えられた例もあれば、「因業」から「因果」への改変のような、別のことばに変えられた例も存する。(6)～(8)は、一文の内部における語句・表現の改変である。(6)は助詞・助動詞といった付属語についての改変であり、(7)は、名詞、動詞、形容詞等の自立語をも含む語句の改変である。(8)は、文単位での改変である。(1)～(5)は、表記を中心とした改変であるために、作品の内容への関わりは僅少である。一方、(7)、(8)は、添削個所が大きいため、作品の内容に関わる例が多い。また、(1)～(8)の型は、紅葉の添削の個所を取り出したものであり、添削の個所が複数の類型に当てはまる場合がある。とりわけ、(8)の文単位での改変では、(1)～(7)の型が含まれる場合も存する。

本稿では以上の8項目について、それぞれ代表的な例を取り上げて検討を行う。

(1) 句読点の改変

鏡花の初期作品の原稿を見る限り、句読点のつけ方は一定していない。最も早い時期に執筆したとされる「蛇くひ」(1898)は句読点が見当たらず、紅葉の手で入れられている。「怪語」をはじめ、「怪語」と近い時期に書かれたと見られる「貧民倶楽部」(1895)、「聾の一心」(1895)、「黒壁」(1894)等は、句点と読点がかともに存する。また、「蝦蟇法師」(1902)、「義血侠血」(1894)、「お弁当三人前」(1898)は読点のみ見られる。9)句読点の付け方は、執筆時期とも関わりが持とうとは考えられるが、その外に、原稿がどの段階のものかにもよろう。「怪語」の原稿において句読点は全文に亘って付されているが、その句読点に対する添削は大きく二つに分けられる。一つは、元来鏡花の原稿にあった句読点を修正したものであり、もう一つは紅葉によって新しく挿入されたものである。前者の例としては、

- ① 「へい何でございます。—{?}
- ② 「道理で。此車の轍は其だな。巡查は。—{?}

9)松村友祝(1980)「鏡花初期作品の執筆時期について—『白鬼女物語』を中心に—」(『三田国文』第4号、32頁。)は、句読点と括弧の付け方を根拠に初期作品の執筆時期を特定している。

の①「何でございます?」、②「巡查は?」等の例が挙げられる。これらの改変は、原稿の句点を疑問符に書き換えた例である。疑問符に変えることによって当の文が疑問文であることを明確にしているが、原稿の他の個所においても疑問符は散見され、紅葉もそれに合わせて文全体の統一感をもたせようとしたのではなかろうか。当時、疑問符が主に若者たちの文に付されていたことから考えると、特徴的な若者ことばを目指し意識して使った可能性もあろう。原稿には、「…」や「!」といった文章記号も多用しているが疑問符の使用もそうした文章性格ともバランスを取る必要があったのかも知れない。

句読点の改変の後者の例としては、

③渠等一種の順礼は(、)加賀能登越中越後の地より数千百人群を為し、長途を徒歩して参詣せるが、順繰りに<sup>かへ</sup>帰郷{り}来りて、霜月の半ばより往来引も切{断}らざりし。

④唯一心に到彼岸を願ふ乞食の如き輩は(、)先むじて帰国し終り、今日此頃帰り来るは、見物を兼ねたる田舎紳士などの懐中暖き連中なれば、宿泊多くは上中の旅店を占む。

の③「渠等一種の順礼は、」、④「唯一心に到彼岸を願ふ乞食の如き輩は、」の例等が挙げられる。読点を入れることによって、修飾の長い文において主文であることを明確にしている。

## (2) ルビの改変

原稿のルビは総ルビになっている。原稿のルビが変更された例としては、①「置きます(をきます)→(おきます)」、②「丸岡(まるおか)→(まるをか)」、③「小坊主じゃ(こぼうず)→(こぼうず)」、④「盲人(もうじん)→(まうじん)」、⑤「驚いた(をどろいた)→(おどろいた)」、⑥「悄然として(しょうぜん)→(せうぜん)」、⑦「と哄然(こうぜん)→(かうぜん)」、⑧「旅店(はたご)→(りよてん)」、⑨「悉皆(しっかい)→(すっかり)」等がある。そのうち、①～⑦は歴史的仮名遣いを正した例である。歴史的仮名遣いは、明治以降、1946年に内閣告示により「現代かなづかい」が行われる以前は社会一般の基準として行われていた。紅葉は、当時通用していた歴史的仮名遣いの原則に従い「怪語」の仮名遣いを修正したと考えられる。⑧は、「旅店」という漢字語の読み方としてより一般的な「りよてん」に変えた例である。⑨も、「悉皆」を音読みした「しっかい」という聞き馴れないことばの代りに、同じ意味の「すっか

り」という理解しやすいことばに変えている。

以上の例から、紅葉はルビを訂正するのに歴史的仮名遣いに基づいて正し、読み方をより理解しやすいものへと変えていることが分かる。

### (3) ひらがなから漢字へ、漢字からひらがなへの改変

- ① 「今、また {又} 此言を耳にす」
- ② 「私の様に謂ひ聞かせてお遣に成り {おやりになり} ましたか」
- ③ 「左様いふのが猶 {まだ} 七八人お在なさるのだ」
- ④ 「其上 {それに} 歩行 {徒歩} 方が却て早い様だ」
- ⑤ 「哄と {どつと} 流れ込みやあがつたので」
- ⑥ 「凶器を以て迫らばいかに、 {什麼。}

ひらがなから漢字への改変は、①「今、また {又} 此言を耳にす」の「また」が「又」に直された例等がある。一方、漢字からひらがなへの改変は、②「私の様に謂ひ聞かせてお遣に成り {おやりになり} ましたか」の「お遣に成り」が「おやりになり」に、③「左様いふのが猶 {まだ} 七八人お在なさるのだ」の「猶」が「まだ」に、④「其上 {それに} 歩行 {徒歩} 方が却て早い様だ」の「其上」が「それに」に、⑤「哄と」が「どつと」に、⑥「いかに」が「什麼」に直された例等がある。

### (4) 送りがなの変更

送りがなが変更された例としては、①「早く着て呉れ、ば可<sup>い</sup>が<sup>が</sup>」の「可<sup>い</sup>」が「可<sup>い</sup>」に、②「斯<sup>か</sup>くして件の標柱 {揭示} は」の「斯<sup>か</sup>くして」が「斯<sup>い</sup>して」に変えられた例等があるが、全体の数が少なく特徴は見出しがたい。

### (5) 漢字の改変

- ① 「北国加州の人太く此 {之} を忌みて、不祥甚だしきは「死」の兆なりとす」
- ② 「お怪我があると言 {云} ひますぜ」

- ③ 「唯 {但} 」
- ④ 「え、何な {甚麼} 男でございました」
- ⑤ 「真 {信} にはいたしますまい」
- ⑥ 「と呷く其顔を旅僧は眺 {観} めて」
- ⑦ 「えゝ！お進行 {出発} か」
- ⑧ 「左様か、と黙首て {頷き、} 」
- ⑨ 「旅僧は杖に扶 {仗} りて、車上の旅客に一揖せり」
- ⑩ 「霜月の半ばより往来引も切 {断} らざりし」

漢字が改変された例としては、①の「此」が「之」に、②の「言ひますぜ」が「云にますぜ」に、③「唯」が「但」に、④「真にはいたしますまい」が「信にはいたすますまい」に、⑤「眺めて」が「観めて」に、⑥「匆ね起き、」が「蹶起き」に、⑦「得手」が「{婦人}」に変えられたような、ことばの読みは変わらず当てはまる漢字のみが変えられた例もあれば、「黙首て」から「頷き」への改変のような、別のことばに変えられた例もある。

#### (6) 助詞と助動詞の改変

- ① 「囁きたる者は、然り、と同じぬ。 {ぜり。} 」
- ② 「未だ欠けた瓦も捕縛ませぬ。 {ん。} 」

助動詞の改変は、①の「同じぬ」が「同ぜり」に、②の「捕縛ませぬ」が「捕縛ません」に直された例がある。①では過去、完了助動詞が「ぬ」から「り」へと変更されている。添削では打消しの助動詞として取られやすい「ぬ」の変りに、文脈に合わせてサ変動詞「同ずる」とより結合度の高い完了の助動詞「り」に変えたと考えられる。

#### (7) 語句の改変

- ① 「明治二十五年師走中旬雨の頻りに降る日 {大雨の日} 上京の途に就きて、」
- ② 「たがの、帰れ {返せ} ば別条は無いで」



- ③ 「面の真蒼な小 {矮小な} 坊主じや」
- ④ 「盲人でも其手 {そんな拙策} は喰はねえ。蜻蛉に目もあり鼻もあり」
- ⑤ 「越前街道に奇 {盗} 賊出没す」
- ⑥ 「我より前に積雪に印したる車轍二条の跡 {の絃を引くが如き} あり」
- ⑦ 「本願寺の参詣人を目懸けて (、) 洪涛の様に哄と {どつと} 流れ込みやあがつたので、越前中床下まで泥水がついて居ります。 {大騒ぎでございませあ。} 」
- ⑧ 「拾うて交附せば、幾度か厚意を謝し威儀儼然 {せし後、} 洋刀を一握して」
- ⑨ 「勝手に前へ行き {てくれ} たまへ、僕は足下の {君の} 親切なる介抱を受けることを屑とせぬ。 {んから。} 」
- ⑩ 「人民に恩を担ふと、其だけ、我輩職分の威厳が無くなる。左様すると不凶足下が賊であつても、恩人といふ? {斟} 酌があつて (、) 拳が鈍ると宜しく無い。其処で {だから} 僕も足下 {君} の為にする処あつて (、) 恩人といふ名称を抹殺するのだ。」
- ⑪ 「何故なら (、) 其程の男に白昼縄附の恥辱を与へねはならないから。義務責任が僕にあるから。 {るのは好ましからんからね。} 」

「怪語」の場合、語句の改変は、類義の表現、あるいは、別の表現への書き換え、および冗長な言い回しを削除することによってなされた。まず、書き換えによる改変には、⑤「奇賊」が「盗賊」に、⑨「足下」が「君」に変えられたような類義の表現や、②「帰れば」が「返せば」に、③「小坊主」が「矮小な坊主」に、④「其手」が「そんな拙策」へと、より適切な表現へ書き換えられた例が多い。他に①「雨の頻りに降る日」が「大雨の日」に、⑦「越前中床下まで泥水がついて居ります。」が「越前大騒ぎでございませあ。」に変えられたような冗長な言い回しを削除することによってなされた例もある。引用文のうち、⑩の「其だけ、我輩職分の威厳が無くなる」、⑪の「義務責任が僕にあるから」は、職分や義務責任に関する記述が削られた例であるが、観念小説との関わりを考える上で特に注意される。それについては、第3章において後述する。

#### (8) 文単位での改変

文単位での改変としては、抽象的な表現や現実性の無い内容の削除が挙げられる。以下、代表的な例を掲げる。

- ① 「其お美麗在らつしやいますことと申しましたら (、) ふんぞり返る位なもので、彼いふお方がお泊り下さいましたのは、手前子孫末代の面目、明日お進登になりました後には、お

隣室をびつたり封じまして、無用の者一切不可入として置きます（コレヨリ以後實際ニアラズ）目算断つて望みの者は齋戒沐浴をいたし、謹むで這入つて移香をくむくむ嗅ぎませうといふのでござりまする。」（原40丁ウ7～11行、全301頁14行）

②「其よりは、拙僧の方が好い知己では無いか。え、お若いの。一所に御帰国なさい。左様すると名もお聞かせ申す。名を道へば、不図、お前の父が日頃信ずる、何の某とか何とか名告つて、どろむと消える的の者かも知れぬ」

（原5丁オ5～7行、全269頁13～14行）

③「耳に声あり「他人之妻」！否然らずこれ【と、心は打消せり、】聞誤りたる精神の迷ひな {な} らむと造次の間上杉は石碑の如く突立ちぬ、為に親仁も立停まりぬ。悪魔は見たらも婦人の声聞ける瞬間には木訥らしき親仁の顔のいかに恭儉なる相に変せしかを駕籠は一問【此ま】隔りたり。」（原34丁ウ9行～35丁オ5行、全296頁11～12行）

「怪語」の主人公、上杉新次は、旅の途中泊まった武生の旅店の主人から隣の部屋に泊っている女性の噂を聞かされるが、引用文①は、その場面の描写である。旅店の主人は、女性の美貌を「ふんぞり返る位」なもので、「彼いふお方がお泊り下さいましたのは、手前子孫末代の面目、明日お進発になりました後には、お隣室をびつたり封じまして、無用の者一切不可入として置きます目算」と、大げさに語り、また、「断つて望みの者は齋戒沐浴をいたし、謹むで這入つて移香をくむくむ嗅ぎませうといふのでござりまする。」と美しい女性に対して抱いている卑猥な欲望を匂わせる妄想を語り続ける。紅葉は、「彼いふお方がお泊り下さいましたのは」以下の主人の話に「コレヨリ以後實際ニアラズ」という添え書きをして削除している。小栗風葉は、紅葉が門弟を指導する際に「此処は変だと云ふ所は朱で棒を引いて、最う一度考えろ」と指導したと回想しているが<sup>10)</sup>、この部分は紅葉からすれば、妄想に過ぎない余計な記述だったのではなかろうか。「怪語」とほぼ同時期に書かれたと推定される「貧民倶楽部」の原稿にも類似する表現が見られる。「貧民倶楽部」はお丹という女乞食を中心とする貧民集団の貴族への対抗を描いた作品である。以下、該当する箇所を引用する。

三令嬢一夫人を随へて（、）都合五人の茶屋女、塗盆片手に「ちよいと貴下」、  
「御休息なさいまし」、「入らつしやいな」と玉の腕も顕露なる {に} 襷懸にそ {けて}  
働き給へば、見る者はアツと {呀と} いふばかり。— {、} 此だけの顔を揃へて女義夫夫  
を仕組むならば、—東京の富は我が所有と飛だ妄想を起すもあり。—再考何れの店も繁昌し  
て貴頭方得意の中に、冬木立の淋しげに扇を商ふ御老女ありけり。— {。} 其公の後室と

10) 小栗風葉（1905）「紅葉先生の門下指導法」『文章世界』第1巻第1号、20頁。

かや七十有余の年紀は積りて七一有余、**実際に無き事なり**《中略》老婦人は瞑目して、「南無阿弥佗仏、これも浮世の義理でござるよ。」さりとはお笑止千萬な。

(原5丁ウ2行～6丁オ9行、全61頁12～14行)

上記の引用文は、婦人慈善会における貴婦人たちの活動ぶり、作品の主要人物である駿河台の隠居と呼ばれる老婦人についての描写であるが、「何れの店も繁昌して貴顕方得意の中に、冬木立の淋しげに扇を商ふ御老女ありけり。{。}」以下の部分には、「実際に無き事なり」という紅葉の評言が付され、すべて削除されている。引用文に描かれる駿河台の隠居は、慈善会会場の雰囲気には全く介意しないで超然とした態度を取っており、誰もが敬遠する人物である。紅葉は慈善会という場にそぐわない、不自然な人物設定も削除している。「怪語」と「貧民倶楽部」の添削に際し、実際にはありえない表現内容に対して朱を入れる紅葉の態度からは、写実主義者の面貌が窺われる。<sup>11)</sup>

引用文②は、「怪語」の前半、旅僧が主人公新次に死相があると予言し、帰郷するよう勧める場面である。「名を道へば、不図、お前の父が日頃信ずる、何の某とか何とか名告つて、どろむと消える的の者かも知れぬ」は、前後の文脈との繋がりが悪い唐突な内容のため削除されたと考えられる。③「悪魔は見たらむ婦人の声聞ける瞬間には木訥らしき親仁の顔のいかに恭儉なる相に変ぜしかを」の悪魔云々との記述も、唐突で抽象的な表現になっているが、紅葉によって削除されている。

### 3. 内容に関する添削

「怪語」が同時期の他の作品、及び後期の作品に繋がる鏡花固有の特性を含有していることは本稿の冒頭で述べた通りである。こうした特性が鏡花の自筆原稿には、より明白に表れていたのが、紅葉の添削を経る中で大幅に改変された。その一つに観念小説的要素の削除が挙げられる。鏡花が1895年、「夜行巡查」(1895. 4)と「外科室」

(1895. 6)の、所謂観念小説を発表して文壇に登場したことは周知の事実であろう。鏡花は、その後も「鐘声夜半録」、「琵琶伝」、「化銀杏」等の観念小説的傾向の作品を発表している。観念小説の最初の命名者島村抱月は、「小説界の新潮を論ず」という一文の中で、「観念小説とは何ぞや。人は之れを解して、作者が世相に対する一種の概念を作中に現化せるもの」と規定するが、<sup>12)</sup>鏡花の作品において顕著なのは、概ね

11) 魯恵卿 (2009) 「泉鏡花小説の生成」(筑波大学博士論文)、184頁.

義務と責務の観念といえよう。「怪語」においても義務と責務の観念が見受けられる。

では、鏡花は観念を如何に作品のうえに具体化していったのだろうか。鏡花がまず小説において実践したのは極端な性格の人物を創造することであった。観念小説に度々登場する極端な性格の人物像についてはすでに同時代批評や従来の作品論で指摘されている。<sup>13)</sup>鏡花の初期小説において、作中人物が他者や社会との関わり方において見せる態度は極めて極端で、他人事に関してあくまでも冷淡な態度を見せるタイプと、積極的に関わるタイプとに分かれる。<sup>14)</sup>「夜行巡査」の八田巡査、「外科室」の高峰医学士等は他者や社会との関係において冷淡な態度を見せる人物といえる。このタイプの場合、行動の基準となるのはそれが職務上の義務であるかどうかである。「夜行巡査」の八田は、それが職務である以上、たとえ相手が恋の邪魔者だとしても、自分の命を捨ててまで助けようとする。一方、「金時計」(1893)の少年、「大和心」(1894)の健児、「壘の一心」の予等は最初から他者や社会と積極的に関わろうとする人物たちである。

ところで、こうした「夜行巡査」、「外科室」に見られるような他者との関わりを拒むタイプの人物類型がすでに「怪語」において表れている点は留意される。本作は、主人公である文科大学の学生上杉新次が旅の途中で出会う人々との間で起る出来事が物語の中心を成す。故郷の金沢から上京途上の新次は、旅僧から前途の死を予言されながらも、失恋の絶望から死を思い、旅を続けている。そこへ巡査の新田義松が登場する。新田は、巡査としての威厳を誇示する高飛車な表向きの態度とは裏腹に、本当は盗賊の首領を逃がし自信喪失に陥っている。新次は、そうした新田のひ弱な内面を見抜き、冷たい嘲笑を送るのであるが、新田が死を想うほど落ち込んだ時には同情を寄せる一面もある。一方、大聖寺の木賃宿である婦人を誘拐しようとする一味の密談を耳にした新次は、事態の深刻さを知りながらも自らの死に汲々して何ら手を下そうとはせず傍観するのみである。だが、誘拐の標的となっている婦人こそ、自分の意中の人であることが分かり、新次が決死の覚悟で婦人を守ることを誓うところで作品は終わる。

「怪語」に登場する巡査新田義松は、物の造型やその名前からして「夜行巡査」の主人公、八田義延を連想させる。新田と八田の人物像の類似性については、夙に村松定孝の「作中の巡査(新田義松)の威儀儼然として私情を交えざる態度は職務に自滅する「夜行巡査」の八田巡査」を連想させるとの指摘以来、定説となってきた。<sup>15)</sup>確か

12) 島村抱月(1895)「彙報小説界」『早稲田文学』第95号、23頁。

13) 鏡花の初期作品における極端な人物造型については、手塚昌行(1989)「泉鏡花と森田思軒」(『泉鏡花とその周辺』武蔵野書房、44頁。)によって森田思軒からの摂取が指摘された。また、須田千里「鏡花文学第二の母胎」(『文学』)は、『使者』からの影響を主張した。

14) 魯恵卿(2010)「泉鏡花の初期作品における人物造型」『日本言語文化』第17輯、韓国日本言語文化学会、512頁。

15) 村松定孝編(1982)『泉鏡花事典』有精堂、52頁。また、弦巻克二(1980)「鏡花の観念小

に、作品中、新田は「職分として最早足下と私情を交えることは出来無い」と職務に忠実すぎて一遍の融通もきかない物として描かれる。新田は一時逮捕した盗賊の首領を逃した挙げく、力果てて道ばたに倒れていたところを新次に助けられたことがきっかけとなり、新次の旅に同行する。だが、新田は新次の厚意や親切を一切受けようとせず、拒み続ける。但し、こうした観念を背負った人物の特徴が原稿においてはより鮮明に表れている点は興味深い。次は、新田が、新次の手助けを断る理由を述べる場面の描写であるが、原稿と初出本を対照して掲げる。

<初出本>

些少でも人民に恩を荷ふと、其府と足下が賊であつても、恩人という斟酌があつて、拳が鈍ると宜しく無い。だから僕も君の為にする処あつて、恩人といふ名称を抹殺するのだ。  
(全283頁6～8行)

<原稿>

人民に恩を担ふと、其だけ、~~我輩職分の威厳が無くなる。~~左様すると不図足下が賊であつても、恩人といふ？ {斟酌} 酌があつて (、) 拳が鈍ると宜しく無い。其処ぞ {だから} 僕も足下 {君} の為にする処あつて (、) 恩人といふ名称を抹殺するのだ。

(原22ウ8行～23オ3行)

引用文からは、新田が情に流され、職務の妨げとなることを恐れており、また、職務と人の情けとを絶対両立し得ないものとして認識している様子が看取される。一方、原稿には、初出本にはない削除された一節が存する。原稿において新田は、人民に恩を受けると「其だけ、我輩職分の威厳が無くなる。」と主張する。新田の理屈に従うならば、倒れている人を助け起すようなささやかな事であったとしても、他人から恩を受けると直ちに巡査としての威厳を損なうことになるのである。何事も針小棒大に捉える新田の姿は滑稽とさえ感じられる。添削では、この表現が削除され、より一般的な論理に変えられた。他にも原稿において新田巡査は、「何故なら (、) 其程の男に白昼縄附の恥辱を与へねはならないから。~~義務責任が僕にあるから。~~ {るのは好ましからんからね。}」(原23丁ウ8～10行)と、自分が背負っている義務責任の観念について語る。引用文では、新田巡査が新次に対しても警戒心を抱いている様子が描かれる。話の展開上、ここで必ずしも義務責任の観念を強調する必要があるわけでもなく、作者の心の奥底に潜んでいた観念が巡査の口を

説) (『国語国文』第49巻第5号、17頁。)は、新田義松について「『夜行巡査』の原型ともみるべき人物」であり、「現世に於ける権威・警官という職務に忠実である、又現世の名誉に執している故に却って戯画化されている」人物であると評している。

借りて表現されたのであろう。初出本ではこれらの表現が削られている。以上の例から見ると、初出本に比し、原稿においては義務と職務の観念がより明白に描出されていることが分かる。

主人公、新次もまた、他者との関わりにおいて極端な態度を見せる。新次は失恋による苦しみから死に救いを求めようとするのであり、そういう新次にとって盗賊らの陰謀や誘拐される危機に置かれている婦人等は所詮他人事に過ぎない。新次は行き違った車の乗客が誘拐の危機に晒されている当の婦人であることを知る場面でも冷淡な態度を崩さない。

続で車来れり三人曳き、除けて通せば行過ぐる時、母衣の中より暗香一脈人を襲ふて東に去る。乗客は慥に婦人なり。新次は冷然として目送せるのみ。

(原31丁ウ8行～32丁オ1行、全290頁8～10行)

新次は何事にもただ「冷然として目送せるのみ」である。そのすぐ後には、

件の婦人に係りたる恐るべき秘密の一切は、記憶に刻みて新次は知れり。知りつゝ何ぞ介意せざる。蓋し死者を活さむ者は、仁恵なる慈善者にあらずして、貪欲なる医師にあらざるか。賊を捕へむは警官の任なり。犯罪の秘密を発かむは探偵の義務なり。新次は「死」を得るに汲々して多繁多忙の人、好むで道路に関係して、身を自から小説の人物たむと務むる如き、閑散無事の好事家にあらざるなり。

(原32丁オ2～10行、全290頁11～15行)

と、語り手が介入し、新次の冷淡な態度について解説を加える。引用文において新次の考えが、最もよく表れているのは、「賊と捕へむは警官の任なり。犯罪の秘密を発かむは探偵の義務なり」という部分であろう。犯罪を阻止するのは、警官や探偵の仕事であり、自分が関与する必要はない。各人それぞれに与えられた職務を果たすべきということであろう。となると、新次の態度は、職務に徹底したあまり人民とは関わろうとしない新田の態度とさほど変わらないのではなかろうか。

一貫して冷淡な態度を取り続けてきた新次は、作品の末尾、危機に瀕している女性が発は自分の意中の人であることが分った途端、その態度を一変させる。

過日丸岡に於て冷然として目送せる三人曳の車中の人、先刻には殆むど介意せざりし武生街道の輿中の客、今や上杉が死を以て隠然保護せむとするの地位に立てり。《中略》渠

は意中の人なりき。

(原稿には該当部分ナシ、全302頁13～15行)

新次は死ぬ覚悟で女性を守ろうとしているのであり、いつの間にか先に述べた他者と積極的に関わるタイプに変っている。新次は、鏡花の初期作品によく登場する、冷淡さの裏側に一瞬にして変えられる熱い情念を秘めている人物とよい。

如上の人物の造型と考え合わせねばならないのは、作品における死の問題である。鏡花の初期作品、中でも観念小説的傾向の強い作品においてはよく作中人物の「死」が取り上げられる。「夜行巡査」の八田巡査は絶対に結婚を許してくれない後見人が掘りに落ちたのを見て、自分は泳げないのに真冬の水の中に飛びこむ。「外科室」で手術を受けることになっている伯爵夫人は、主人ではない男、即ち手術の執刀医である高峰を愛しているが、麻酔中に事を口走る事を恐れて麻酔無しで切ってくれと言い張る。高峰医師はこの女性を切ると同時に自分も自殺する。「海城発電」(1896)において、赤十字社員神崎愛三郎は傷ついた兵士の治療以外の日本軍の為の偵察を愛人が犯され殺されても拒否する。また、「鐘声夜半録」(1895)では主要人物全員の死が暗示される中で話が閉じられる。「義血侠血」(1894)の検事代理もまた、恩人である芸人白糸の罪を裁き、死刑を宣告した後、自分は自殺する。一瞥しただけでも観念小説的作品の作中人物が自分の信念を曲げず、死を以てその信念を貫こうとする傾向があったことが分かるが、「怪語」にも死への傾斜が見られる。

次に、「怪語」の原稿の冒頭部分を再度引用する。

(小説)

揭示標 {其賊}

(八十一ヨリ頁附)

第一「<sup>たびそう</sup>旅僧予言<sup>ぜんとし</sup>「前途に死あり

文科大学の学生上杉新次、以前の経歴は爰に説かず。明治三十五年師走中旬雨の一頻<sup>ひん</sup>に降る日 {大雨の日} 上京の途に就きて、今や石川県石川郡、松任より粟生までの路にあり。

(原1丁オ冒頭、全266頁冒頭)

「怪語」の原稿の冒頭には章立てがなされ、各章には章題が付されている。この章題は初出本においては全て削除されている。第1章の題名は、「旅僧予言「前途に死あり」」である。新次は、旅路で出会った旅僧から死相があると予言されるが、章題は、そ

こから取ったものである。また、作品は、「文科大学の学生上杉新次、以前の経歴は爰に説かず。」という書出しで始まり、過去の経歴についてあえて明かさないと明示している。その一方で前途には死があるという旅僧の不吉な怪語で始まるこの作品は、新次が旅を続けることを宣言した以上、話の展開につれ主人公新次が死へ近づく構造になっているといえよう。その上、新次自身死への願望を表明しており、死が作品の主調をなしていることは間違いなからう。ただ、死の問題を扱っているにも関わらず、作品全体の雰囲気は重くない。それは、作中人物の行動や考え方が未熟さを抜けきれておらず、その分、人物の問題意識が甘いからであると考えられる。職務の妨げになるからといって細やかな人の手助けすら断る新田巡査の行動は幼稚であるとしかしいようがない。新次の「死」についても、さらに考える必要がある。作品内で新次は、失恋の苦しみから死への願望を度々口にする。

絶望の痛苦を癒すものは、宇宙間唯死あるのみだ。死を禁る心は叫べり、人の子たる義務を奈何するかと。死を教ゆる心は曰く、自殺は不可なり、然れども自然の死一天が此世より取去るは可し。  
(原6丁オ1～6行、全270頁7～9行)

引用文からも明らかであるように、新次は「絶望の痛苦」を死ぬことによって逃れようとしている。盗賊の一味がある婦人を誘拐しようとする計画を知っていながらも、座視していた新次は、作品の最後のところで当の婦人が自分の意中の人であることが分かり、決死の覚悟で婦人を守ることを誓い、作品も結ばれる。このように物語の内容を辿ってみると、物語が展開するにつれ、新次の前途に待ちかまえていた死の内容も明らかになってくる。物語の前半、不吉な予兆が出現し、また、旅僧によって予言された死は、婦人の出現によってより具体的なものとなる。つまり、絶望に起因した新次の死への願望は、愛を守護するためのものへと変質するのである。そういう意味で考えるならば、決死の思いで愛する人を守ろうとする新次の人物像は、死ぬことによって愛を全した「外科室」や「義血侠血」の人物像と通じ合っているといえよう。

以上、原稿の内容に関する添削を検討することによって、義務と責務の観念を背負った観念小説的人物の造型や、初期作品の主要なテーマの一つである死への傾斜が、「怪語」の原稿において明確に表れていることを確かめることができた。こうした観念小説的傾向が鏡花の最も初期の作品にすでに現れていることの意味は大きいといえる。



## 4. おわりに

以上、「怪語」について鏡花の自筆原稿を手掛かりにして考察を行ってきた。紅葉の添削は、句読点のような語法に関するものから人物の造型に関わる内容に踏み込んだものまで幅広く行われた。語法の添削としては、語句レベルの変更が多く、同義語やより適切な表現への言い換えや、誤字を改めることによってなされた。近代叙述文体は、最終的には新聞によって整えられていく。当時読売新聞社の社員であった紅葉には、当然のことながら規範文に対する意識が存したと見られるのであり、その規範意識によって鏡花の表現を修正したと考えられる。

内容に関する添削において目立つのは、抽象的な表現や、現実性の無い内容が削除された点である。勝本清一郎<sup>16)</sup>によれば1893(明26)年から1896(明29)年頃までの紅葉は、「多情多恨」において、「三人妻」など前期の「荒唐無稽性を全く捨て、もっと直接的なりアリズムの方法へ打開を試み」ていた時期である。鏡花の原稿に対する添削態度には、当時の紅葉の小説創作に対する姿勢が反映されているのであろう。

「怪語」の原稿は、印刷に回された最終段階のものであり、作品の構想等大きな変化は見られない。ただ、原稿には作品の評価に関わる重要なヒントが隠されている。従来の研究においては、「怪語」の持つ観念小説的要素として主に義務観念の権化のような「夜行巡查」の八田と「怪語」の新田との人物造型の類似性についての指摘がなされてきた。鏡花の原稿には人物の造型のみならず、作中人物の口を借りて直に語らせることによって、より強く義務の観念を表わしている。それが紅葉の手で削除され、結果的には観念小説的色彩が薄れたのである。つまり、鏡花は、作家出発期から義務と責務の観念を強く打ち出した作品を書いていたことになる。これまで、鏡花の初期作品については、1895(明28)年の「夜行巡查」と「外科室」の所謂観念小説を中心にして、その後の作風の変化をどのように説明するかが一つの論点となってきた。だが、観念小説期以前に書かれた「怪語」の原稿においては、観念小説的傾向、及び鏡花文学の主要テーマの一つである死の問題がより鮮明に表れていることが確かめられた。「外科室」や「夜行巡查」を鏡花文学の出発とする従来の見解には、観念小説以前の作品や、同時期に書かれた異なる傾向の作品が排除されているのである。のみならず、そうした評価の背景に、師紅葉の指導と介入により、鏡花の個性が変質したり、あるいは、鏡花の個性が強く表れている作品の発表が後回しにされたことが関わっていることは言うまでもなからう。「怪語」において確かめられたように、観念小説期以前の鏡花の初期作品はいろんな可能性を含んでおり、原稿に対する研究はそうした可能性を探るための有効な手段といえよう。

16)勝本清一郎(1980)、「尾崎紅葉」『近代文学ノート3』みすず書房、47頁。

## 【参考文献】

- 「泉鏡花年譜」（1986）『鏡花全集卷一』岩波書店、1986. 5頁.
- 勝本清一郎（1980）「尾崎紅葉」『近代文学ノート3』みすず書房. 47頁.
- 手塚昌行（1989）「泉鏡花と森田思軒」『泉鏡花とその周辺』、武蔵野書房. 44頁.
- 村松定孝編（1982）『泉鏡花事典』有精堂. 52頁.
- 小栗風葉（1905）「紅葉先生の門下指導法」『文章世界』第1巻第1号、20頁.
- 越野格（1971）「鏡花の観念小説—その人間像をめぐって—」『日本近代文学』第24集、55頁.
- 島村抱月（1895）「彙報小説界」『早稲田文学』第95号、23頁.
- 須田千里（1992）「鏡花における女性類型」『文学』第3巻第2号、岩波書店. 156頁.
- 弦卷克二（1980）「鏡花の観念小説」『国語国文』第49巻第5号、17頁.
- 弦卷克二（1987）「鏡花的世界の予兆」『論集泉鏡花』有精堂. 6頁.
- 松村友視（1980）「鏡花初期作品の執筆時期について—『白鬼女物語』を中心に—」『三田国文』第4号、30頁、32頁.
- 魯恵卿（2009）「泉鏡花小説の生成」筑波大学博士論文、184頁.
- 魯恵卿（2010）「泉鏡花の初期作品における人物造型」『日本言語文化』第17輯、韓国日本言語文化学会、512頁.

## 要 旨

本稿では、鏡花の最初期の作品である「怪語」を対象として、原稿における紅葉の添削のありようを検討し、改稿の方向について検討した。紅葉の添削は、句読点のような語法に関するものから人物の造型に関わる内容に踏み込んだものまで幅広く行われた。内容に関する添削において目立つのは、抽象的な表現や、現実性の無い内容が削除されたことである。こうした添削からは、紅葉の写実主義者としての面貌が窺われる。また、原稿には観念小説的傾向、及び初期鏡花文学の主要テーマの一つである死の問題がより鮮明に表れていた。それが紅葉の添削を経る中で、作品の性格が変質し、発表も後回しにされたのである。これまで、鏡花については、明治28年の「夜行巡查」と「外科室」の所謂観念小説をその文学の出発とし、その後の作風の変化をどのように説明するかが一つの論点となってきた。だが、こうした見解には、観念小説以前の作品や、同時期に書かれた異なる傾向の作品が排除されているのである。「怪語」において確かめられたように、観念小説期以前の鏡花の初期作品はいろいろな可能性を含んでおり、原稿に対する研究はそうした可能性を探るための有効な手段となろう。

キーワード：観念小説、死、自筆原稿、尾崎紅葉、添削、鏡花の初期作品

투 고 : 2013. 11. 30  
1차 심사 : 2013. 12. 14  
2차 심사 : 2014. 1. 4